

「飯豊乃山婦美」現代語訳

(飯豊山記行序) 省略

(飯豊山踏序) 省略

「附言」

一 出羽の置賜（おいたみ）郡と陸奥の耶麻郡と越後の岩船郡との間に大きな山があり、いいでの山という。峯は空にそびえ雪は常に残り、高さは月山や鳥海山にも勝る。あまり世の中で知られていないのは、奥まったところにあるからだ。

山頂にたつ神を飯豊の権現ごんげんという。毎年、何百、何千の人が詣もつでる。詣でる場合は、二十一日間行（ぎよう）をして、一日に二回垢離こりをとる。垢離とは禊みそぎである。もし、行をおろそかにして登ると必ず命を失うといわれている。

一 飯豊という神社は、陸奥（東北地方）には多い。陸奥国賀美郡飯豊（いいどよ）神社、白川飯豊比売（ひめ）の神社、安積郡飯豊和気神社などある。

これは、清寧天皇せいねいが死んだときに、弘計王おけ顕宗天皇けんぞうと億計王おけ仁賢天皇にんけんの兄弟が互に譲り即位しなかつたので、姉の飯豊青尊（いいどよあおのみこと）が短期間即位したことがありこの皇女をまつつて飯豊という。

豊を「どよ」と濁るのは、上から読む連声れんじょうである。「どよ」を縮めると「ど」となり、「ど」が「で」と変わって「いいで」という。豊嶋と書いてでじまと読むことがある。これは、初文字を濁るので連声ではない。

秋の実りが良い時を、でき秋というので、豊の字をでと読むのも一理あり、なお考える必要がある。

一 そもそも、この山は置賜郡の山で、麓の岩倉村（現在の山形県飯豊町中津川）の岩倉寺別当だったが、伊達政宗が米沢にいたときに戦争が絶えず、お堂や社（やしろ）が荒れ果て壊れたが、会津の一の戸村の薬師寺の油明法印が道を開いて、堂社を再興した。

蒲生氏郷かもうじきとが会津にいて米沢を領地とした時、岩倉寺と薬師寺とがこの山を争った。氏郷は解決できず蒲生源左衛門をして豊臣秀吉に訴え、秀吉は、堂の向いている方の山だと指示した。

五社権現は、会津に向いていたので薬師寺が支配し、蔵王権現は米沢に向いていたので岩倉寺が支配したという。一説には、五社の堂も米沢に向いていたが、会津よりいち早く登って自分の方に向けたという。

蔵王権現の堂（今は、大黒という）は、何回会津に向けても米沢の方にむき直したという。山容から考えれば、無論、米沢の山である。

八束穂のたりほの稲の米さはに飯豊の山はありとこそしれ

と私が言っても、今では甲斐がない。この山に詣でるのは、葉月（八月）晦日（末日）である。

その節、三日前に岩倉の里へ多数登って、道の左右の草を刈り、蔵王、大日、御田植、地藏、御沢などの場所に小屋を作り、宿にもした。このうち、地藏嶽（地藏岳）のみは御室といって板ふきの山小屋を造ってあった。御沢より上は、会津から登れる。

頂上に登って見れば、米沢は遠い。南は会津の磐梯山、磐梯湖（猪苗代湖？）、上野こうずけの妙義山、榛名山、下野しもつけ

の黒髪山（男体山）、西は越のうみづら（海面？）、佐渡の洲（しま）、能登の岬まで見渡すことができる。

そこで、佐藤秀臣ひでおみは、私の歌友で絵が上手な人だが、天保九（一八三八）年七月ふみつき中旬、浅間桂陵が母の喪にこもっていたのを、二人して訪問した。

秀臣が私に言うには、此の度、氏家高庸と飯豊山に登ることを約束している、高庸は、飯豊山の麓の岩倉の里にいて、待っているのです、おまえも行け。面白いところは画に書き、歌を詠めなどと、そのかさされて出発の日を決めて帰ってきた。高庸は、西の山里の出役という役人である。

一 この山の神を拝む時は、えいほうがりきちえだんかいにしんぜん大慈大悲の飯豊の権現、と唱える。

これは、永保元年に、高嶺という里の、ちえだんかいという二人の獵師がこの山を開いたので、このように唱えるという言い伝えがある。

ちえだんかいなどという呼び名の獵師がいるかどうかはともかく、この山は常に獵師が入って、鹿や猿をとり、山をけがしているが祟りもないので、獵師が開いたなどというのであろう。

ある法師が言うには、これは真言密教で唱えることで、恵宝願力智慧壇戒忍進前、と書くのだという。

一 文政の末から、豊作の年が少なく、米価は高く、世の中は穏やかでない。天保元（一八三〇）年と三（一八三二）年と、稲が実らず天保四（一八三三）年も、また、ほとんど稔らず、近くの国の人も多数亡くなった。また、六（一八三五）年、七（一八三六）年と荒れて、東の国々はとても飢えて、四年よりも人が亡くなっている。九（一八三八）年の夏も、雨が降り、寒いので、皆、真つ青になったが、七月になって

晴れて暑くなった。

私が飯豊に登った頃は、みんなの心配は杞憂だったと喜んでいたが、結局、この年も稔らなかった。こんなことは昔はなかったし、今後もないだろう。

荒れにかかずらっていることばかり多かったので、詳しく書いてみた。

一 この山ふみは、苦しい目だけ見たものから記しておけば、老いの慰みともなると思い、思い出すまにまに書き留めたものだ。小生は、髪は白いが、文章能力は幼いので、みやびなことばで、ありのままに書くのも難しく、文字の音も用い方言も混ぜ、あるいは漢詩などを作つて様子を描写する。

そうではあるけれど、これは大げさだと書いては消し、また思い落としたことがあるとて、加えなどして、自分でさへ読めないほどになってしまった。

再度書き改める気持ちも起きず、机のすみにおいたままにしていた。天保十（一八三九）年の秋は、実り豊かで酒造りも許されたので、心も勇み、酔いの勢いで書き改めようと、ちりを払って、取り出してみしたが、しごらしかしたる（意味不明）文のあやなれば（意味不明）、書くことは難しく、師走（十二月）の初めに筆を起こし、あくる年の睦月（一月）の末に書き終えた。

秀臣にも相談していたので、同じ頃に画もできて、一卷となった。飯豊乃山ぶみという。この書を書いたのは、泉崎賢親、またの名を真畔まぐらといい、画を書いたのは、佐藤秀臣、画の名を雪齋という。

「飯豊の山ふみ」本文

〔米沢を出発〕

天保九年ふみ（七）月二十日あまり二日の暁、飯豊山に登ろうと、佐藤秀臣と約束し、前夜からその心構えで寝た。月夜鴉に呼び起こされて、やまわけころも（山分け衣、登山用衣類）を着ながら

林頭白月宿鴉驚

総外翻飛啼数声

應知泉老伯秋暑

説道山溪侵暁行

と吟じると、秀臣かと打ち叩いて、夜が明ける、さあ早くと驚かす。

かりそめの別れだけど、家の者に別れを告げて出発し、月が高くあるのを見れば、夜はまだ丑うしの刻半まば（午前一時）である。

天の原はりてかけたるしらま弓、夜道のほうが良いと冬でもないのに霜を踏みながら行く。一の坂、二の坂などという坂を越える。

市人の いち路をいそぐ いちのさか はこぶ重荷の 坂も越えけり

といいつつ、また、大樽、小樽という橋をわたり、矢子という里に至る。

此の年ころ民草の実りが悪くて酒を造ることを禁じられたので

おおたるも　こたるも橋の名のみにて　やことにとへど　酒なかりけりと戯れながら行く。

くくり清水を経て口田沢の里に至る。このほとりは、春の早蕨、秋の菌（くさびら）取りに来た道なので、おぼろげでない。里の半ばから右の方の山道に入る。ここより先は初めてゆく所で、夜道はおそろおそるだが、差はなく、私が行けば月も行き、止まれば月もとまり一緒に行くように思えて

西の山　いるになれたる　月なれば　道しるべして　われとこそゆけ

と口ずさんで山に登る。なかみね峠という大松峠ともいう。少し降りて、木のもとに休む。まだ夜は明けないが、朝食（かれい）を食う。

山を下り、田のあるところに至る。家が二つ三つある大松という所で、大舟村だ。また、山に登る。おいせ峠という。夜が明けた。こしじろという小さい虻がたくさん飛んできて、身体に集まってくるので扇で払いながら行く。

この虻は払うといよいよ集まり、静にしていると飛び去るといふ。そんなことは知らないで、扇を持つ手を三カ所刺されて、とても腫れてしまった。

頭白与腰白　略如成匹伝　刺吾還撃爾　何以有仇讎

「おいせ峠（大舟）」

山の頂上に神明（伊勢の御神をいう）の宮居ある。それで、おいせ（伊勢）峠という。この所より玉庭村である。やや下つて、おいせ（御伊勢）町を過ぎ、ゆたという所に至る。このほとりの里の名を詠んでみる。

おほぶね（大舟）の ゆた（湯田）のたゆたに 世を怪なは

たまには（玉庭）へも 老せ（お伊勢）さるらん

田のほとりを通るたびに稲の穂に心が行き、秋の実りの善し悪しを話しながら行く。ある家に休んで草鞋を取り替え主の老人に、このあたりは山里だけど風になびく穂波の様子は豊作のようだねと言うと、老人は、頭を左右に振ってそれは田を知らない人の寝言で刈つて後に夢が覚めるものだという。

こやつは稲の実りが悪いことを願う腹黒い老人だと、つぶやきつつ出る。板橋を渡る。寺がある。法泉寺という。またゆくと道が二手に分かれる。左をしん道といい、右を矢の沢道という。皆、内中津川に行く。矢の沢道に行く。

かうや（高野）沢を過ぎ、矢の沢峠に登る。朝日が昇り、ようやく暑さを感じる。松の下に憩い、衣をひとつ脱いで背負って行く。山のかひ（峽）を行くこと十町ばかりはるかに矢の沢の里を見ると、山の景色はとても素晴らしいので秀臣に

見渡しの 山の気配は なかなかい なが筆からぬ 絵にこそありけれ

といへ秀臣も

山眉の おのつからなる 氣配にも なほわかふでを かさんとそおもふ

とて懐から柄の短い筆をとつて写生する。しつの男が山畑に種をまくのを見て、その種は何かと尋ねると、かぶら菜と答える。

もののふの 矢の沢といふ 里にこそ かぶら大根（おほね）は 植えるなりけれ

と言うと男は合点できない様である。この里は皆、炭焼きを生業としている。家が左右に並んで十一軒ある。その中に黄色のあやしい岩の山がある。その山を登っていく。下を見下ろせば家に沿って清らかな小川がある。岩がくぼんで、^{かけい} 簞のようになってい流れていく。この流れに従つて下ること十町ばかりで滝があり、五丈ばかりで、布引きともいう様子である。

その滝を見たいと思うが、今日は岩倉までと決めて道はまだ遠く、帰りにでもと、先に進む。ここしき^大坂道がある。昔沼峠という。暑く、あえぎあえぎ登る。中津川は、非常に米が乏しいと聞くので、自分の食う分ほど背負つてきて、初めは背負つているとも思わなかったが、疲れるに従い重くなって耐え難くなってくる。

巔にくさの庵がある。玉庭と内中津川との境である。新道より登ってくるのもこの庵の前で行き会う。この所は飯豊の道者のために作ったかりいおり（庵）である。

呑み食うものは言うまでもなく、各自が準備すべき旅の用意さへ、商売にしている。昼食を食べ、瓜など食べまだ物足りなく、筵の戸張を押して奥を見ると、大きな岩に穴を開けて甕にしている。とても趣の

ある様子だ。

主は気が利いて、さあ茶（酒）をどうぞと、大きな器に濁ったものをついで、与えた。言いようもなく嬉しかった。

両岐合処棘棒開 草店留人炙芋魁

最是主人能解事 新葱一椀呼茶来

道者どもが集まり、自分の好み好みに買おうとする。ああ、うるさいと思い、二人は出発した。峠を越えて西を見ると中津川の十四村が一目で見渡され、白川の流れが帯のようで、眺めは譬たとえようもない。

ぬさ（神への捧げ）をたむく（手向）べき所をたむけというが、これをいい間違まちがい、たうげ（峠）と言いうようになった。この旅はぬさも持たないので、例の漢詩をひねり出して

嶺上卸筈憩石根 望中別開一乾坤

川流断続山高下 各処炊烟十四村

〔須郷村に着く〕

このように手向けて坂道を下る。須郷村に至る。板橋あり。桁をあちこちから畳んで出し柱は使わず架けている。これをだしばしという。帰ってきた道者どもが、去る十八日はお山がとても荒れて、たくさんの方が失われたというのを聞いて

咄々有奇事 道途人各伝 怪風生洞口 毒霧失崖顛

甲倒懸高樹 乙投卑碧澗 不仁老天狗 吾欲往繩愆

長い爪をして、眼をつかみ、つぶされそうな、さか髪をとって谷底へ落とされたのか、などと言いつて行く。所々に菅を刈って干しておくのがある。このあたりは、皆、笠を編んで仕事にしている。河内の郷の名前に、すがふという所がある。菅生と書く。すげ(菅)おふ(生)の意味である。

この辺は、菅沼峠の麓で、すがが多く生えているので、もとは菅生だったが、最近、須郷と書き間違いた。法栄寺という寺がある。修験である。清水が流れる柳陰で、少し立ち止まる。川の向かいに数馬村が見える。山に登る。六角峠という。巔に石の塔がある。道祖神(さへのかみ)という。眺めがあり、しばらく休む。

ここから上原(うえばら)という。少し下ると雲洞庵という寺がある。曹洞宗である。橋がある。これもだし橋である。岩倉まではこの川を左に西南に行く。しら川という。南の方に、遅谷村の内下谷地を過ぎ、須郷より一里という。

道を進み、何某という医師(くすし)と逢う。竹谷という所に行つて帰るのだという。芝生に三人並んで話していると四十代くらいの髪の男が来て、たばこの火を乞う。医師(くすし)は、この男に、二人の珍しい人(客人)に、もてなす茶がないかとほのめかして言うと、心得たが、刀をふたつ置いてあるのを見て、横目と疑ったようだ。

初の程は、うけびかざりしが（意味不明）、暫し見続けるうちに、恐れる様子もなくなった。あちらに見えるむくらふ（葎生）はわれわれの宿である。いざと伴って行く。年の荒れ日にやつれている。家は小さくないが、貧しいようだ。

すのこに腰をかけて待つ。間もなく、大きなひさげ（やかんのような金属製の容器）に濁ったものをいれて持ってきた。これをその隣に、こひえつ（意味不明）とすすめた。いかにもその味は酸味がある。山奥なので、み魚は、食べない。

これを召し上がれというのを見れば、ひともじ（蒜）に味噌をそへて出してきた。杯を順々にめぐらし（ずんながし）、思わぬ興に行くことをさへ忘れそうだが、日は高くなるとて、この家を出て、くすしと分かれる。

ひともじを食って、足の十文字を踏むはあやしい。また転んだので

はちす葉の けふはにこりに しみければ あさむきしねて 露どころべり

と戯れ言を言って、白川村を過ぎる。家十七軒あり。北小白川寺の由

暮色真成一幅図 寺前雲樹半模糊

桔槔未上蘭盆火 百尺竿頭点独鳥

暮れたと思えば、山の陰になっている。上谷地村に至る家九軒あり、川の南に河内戸村が見える。右の方に、八幡宮がある。また右に外中津川を経て小国に行く道がある。

「岩倉に着く」

岩倉に着く。下谷地より一里ほどである。村長高橋文右衛門の家に入る。氏家高庸はこの家において、待ちわびたと出迎えてくれた。主の文右衛門はむそち（六十）あまりと見えて、げにひとむらの（一村の）おもし（重し）ともなるべき風貌だ。背負ってきた米を出し、明日の山踏みをねんごろに頼んでおいた。文右衛門は、いざ出居にとておのらを請じとやかくやいたはりいう（意味不明）。窓を開けて西方を見ると、おおきな岩山がある。御蔵山という。この里を岩倉というのもこの山から出た名前である。

嶺より少し下に真っ白に星のように見えるものがある。石綿というものだ。風呂に入ったりしたが、まだ日が暮れないので高庸は、不動の社を訪ねてみると、一緒に行く。橋をわたる。あちこちに幟がたくさん立っている。皆、飯豊山大権現と書いてある。

道の左に不動堂がある。木立が茂って神々しい。別当を不動院という。また岩倉寺ともいう。真言宗である。飯豊の札を売る。その札には蓮華寺と書いてある。右の方に龍高院という曹洞の寺がある。

川の向こうに、高造路という家が四軒ある村があり、不動院に入り、少し休む。医師（くすし）だといふ総髪の男がいた。口ききたるものにて、三人に向かい、最近、おかしい事があつたと語る。あちらの龍高院の住持は黒和尚とあだ名される荒々しい法師だ。自分の様にも似ず若い尼を養いおいていた。そもそもこの寺の住持は葉月の節は、晦日の内は地蔵が嶽に登り、守り札を売るのが習わしだった。

今年もかの黒和尚は登っていて、寺には尼と看主の僧を残しておいたことを心許なく思ったのである。ひそかに下り、寺の内を垣間見ると二人は爐のほとりに睦まじい様子でものを食っていた。

和尚は耐えられず、すつと入って事を質すこともしないでつかみかかり、おのれ看守の大盗人と手を握って目鼻のけじめもなく強くうった。看守は説明する間もなく、かろうじて逃れ出て村長の家に隠れた。和尚は、丸い頭にはちまきをして棒を振り回して追いかけて、出てこい、出せと息巻きいう。

多数集まって、とさまかうさま（あれこれ）と言いなだめるが、いよいよ荒びて言うことを聞かない。さすがに、村長文右衛門に諭されて、おもなく（人に合わせる顔がなく）と思い、はちまきをしていた手ぬぐいで顔を覆って帰った、と扇を持って膝を打ちつつ語る。

三人は大いに笑ってこの寺を出て村長の家に帰る。夕餉にマスターケという赤いきのこを煮てもてなしてくれた。明日は、つとめて（早朝）に、出発すべしと、時間もふけぬうちに枕をとって寝る。

軒の樋の音に、心がすみ、寝られなかった。少しまどろみ、三人とも目が覚めた。戸を押し開けると、空は夜のようにでもない。小雨がそぼ降っている。時守が時刻を教える鼓も打たず、山寺に鐘もなく、飢饉で鶏も飼っていないので、夜は丑（午前一時〜三時）とも寅（午前三時〜五時）ともはかりがたい。

〔飯豊山に向かう〕

文右衛門の末っ子の富蔵は、御山に八度登ったというので道の案内をしてもらおう。また、与一という男

を連れて行く。この二人で朝食、昼食米、味噌の類を背負う。五人して家を出る。瘠せた犬もついてきた。どんな気持ちかは分からない。

昨日、詣でた不動の堂は、飯豊に登る拝所の初めなので、拝ませた。此の里人も葉月の節だけ詣でるそ
うだ。御蔵山の麓を過ぎる。岩倉より八町あるというが、夜で暗いので岩の様子は見えない。

玉鉾の みちたつたつし 手束杖 つきもおくらの 山の下蔭

と言つて過ぎる。上いはくらといいい家三軒ある。右に弁天堂がある。箴（おさ）橋を渡る。こちらの岸からあちらの岸へ、ながい木を二本渡し、小柴を横に編んである。その様子が箴（おさ）に似ているという。人が歩くと橋が揺れてとても危ない

天の川 わたるこちぞ せられける をとたなはたや かくるおさばし

まだ文月（七月）なので、棚機（たなばた）も悪くない。踏み木の橋は古い和歌にもあつたけれど、箴（おさ）のはじめはつらいと秀臣は言う。右に大黒天があり、御蔵山の裏の方を拝むところがある。御境参りという。岩倉から一里来て、竹谷という所に着いた。

ちる露に そてもしほりて 行過ぎぬ 風の竹谷の しののめのそら

また箴（おさ）はしがある。先に渡ったものより高くて、危ないと思った。川のこちらに家が一つある。住んでいる人が皆腹の病で寝込んでいるという。昨日、下谷地であつたくすし（医師）は、この家を訪問したのでらう。

川のあちらに家が三つある。家の前に赤い小山がある。近づいて見ると山ではなく、木地を挽いた屑を積んでおいたものだった。木地をひくとは器の木地を轆轤（ろくろ）でひくことをいう。

夜がようやく明けた。ここより奥に家はない。三町ばかり行って川を渡る。道者どもは、この川で垢離をとる。小屋がふたつある。岩倉の境留、伊藤応吉という者が、道者にくわそ（過所切手）を与えたものをここで改めている。茶屋もして、宿貸しもするという。

小屋の右に蔵王権現の堂がある。それで、この所をおざわうという。ここから川を左にして西々と行くように覚えている。八町ばかりで、葡萄沢という所に着いた。

川の向こうの沢に従って行くと会津に行くという。この葡萄沢に、孫助という者が住んでいた家の跡がある。孫助は、もとは広河原という沢にある木地小屋の者である。木地小屋の者というは、奥山だけにあつて、器の木地を造り、世間と交わらず、ひっそりと住んでいる。世間の人も卑しんで人数に数えず、おとしめている。孫助は、幸いにも家が栄えて、広河原は山枯れ（木地にする木がなくなってしまうことをいう）で、ここに移り住んで家あつきしてうたてつらね（意味不明）、人をたくさん使い、沢田、山畑を開墾し、豊に暮らしていたが、なお飽きたらずに思い、悪者にそそのかされて贖金に手を出し、文政九年の冬に磔刑に処刑された。

松のもとに墓が二つ、三つある。草むらの中に、家の基礎、柱が朽ちているのさえ残っていてとてもあわれである。

かはの平を過ぎ千本松に至る。右の沢の嶺に、松が多くある所を富蔵が指さして、去年の冬、ここで大きな熊を打ちもらした、思い出す度くやしいという。彼が家に鉄砲を架け置いていたなと思ひあわせて、勇ましいことと思う。もとづのう（元豆納）一本松などというところを過ぎ、あひよし沢に至る。

熊のすむ あら山中も わぎ（吾）もこ（妹子）に あひよし沢と きけはなつかし

「大日に着く」

御蔵王よりここまでは、道の左右に高萱が生い茂っていて、あるいは大樹の林を過ぎ、または川の岸伝いなどを行く。あひよし沢より十二〜三町来て、大日という所に至る。岩倉より三里あるという。地蔵が岳の左右の沢より流れてきた水の落ち合う所である。川の北に不動堂がある。川を渡って南に大日の堂がある。小屋も左右にあつて、道者の宿になつてゐる。

この左の川には、穴堰あなせきの水が混じつてゐるといふ。穴堰のことは後で書く。ここでも道者どもは垢離こりをとる。

このほとりにがん滝、鳴滝、竜門の滝、霧まの滝などという滝があるといふ。大日のかたにある小屋で休む。空は曇つて、雨は降り止まない。大日の堂に

みほとけと 天津おほひ（大日）の 名にしおはば 雲はらしませ 雨はらしませ

と読んで、手向けたがなお雨は晴れない。富蔵、弥一は、背負つたわりこから、ぼた餅を取り出して、朝

食に与えた。腹が空いていたので多く食べてここを出発する。ここより地蔵までは嶺伝いにひたすら登りに登る。芝や草をつかんでよじ登り、十余町登り、ざんげ（懺悔）坂というけわしい坂がある。鉄の鎖がついている。その鎖をつかんで登る。

また直登して登ること十四〜五町で、おたうえ（御田植）に至る。小屋の左に堂がある。道者どもは、その堂の前に、まんさく、やしやひさくなどという木を手折り田を植えるまねをして、豊作を祈るという。

ここまで登った坂の数は、八十とも百とも読みわかず（意味不明）。ずいぶんと高いところまで登ったものだと思つたが、なお、地蔵が岳まではの三分の一と聞いて、足も萎なえたように感じる。雨は晴れ間なく降っているが、暑さに耐えられず、雨着をあるいは着てあるいは脱ぎ、汗だくだくに濡れ、あえぎあえぎ行く。

麓の方を下し見れば、普通は空に見える白い雲は大地にぴたつとついたように低く見えて、高い峰々は雲から半分より上が現れている。降ってくる雨は空高く見える雲から降っている。

高庸は、健やかでいつも先頭を行き、私らを待つ間に筆を取って何百歩歩けば何町になる、道程を記録している。竹谷を過ぎてここまで、いく町いく里と書けるのは、高庸のおかげである。

高庸が言うには、文政八年（一八二五）の秋、子どもを背負った女の乞食が、物乞いして岩倉を歩いていたが、心狂って御山に登った。狩人が見て、岩倉に来て告げ、大変なことだと里人が多数分け入って、それぞれに探し、子どもの遺体を発見した。女は、どこに行つて死んだのか、発見できなかった、と語る

と、弥一が聞いて、ああ恐ろしい、御山では、このような汚れたことは、言葉にするのもためらわれるものだと、顔が真っ青になった。

お田植えより二八〇九町登り、外中津川滝村より登る道がある滝切り合わせという。切りあわせとは、この山の習慣で、二つの道が合わさる所をいう。また、一〇二町いくと地蔵のだまし坂という場所がある。地蔵が岳に登ったと喜べば、間違いで、まだ下るからである。

〔地蔵岳〕

このあたりから大きな木はなく、小柴だけになり、滝切合より二〇町ばかりで、地蔵が岳に至る。巔に二間半に五間の板屋がある。御室（みむろ）という。黒和尚は今日もない。また、看守を叩きに下ったのだろうか。御室の左に地蔵の堂がある。鉄の鰐口わにぐちがかけてある。慶長十六（一六一一）年五月吉日奉鈴木拾左右衛門尉寄進という文字が鑄込まれている。この拾左右衛門は、米沢の大町の検断けんだんだったが、天和三・一六八三二 年の春に罪があつて家が断絶した。

犬は、ここまで従つてついて来たが、お堂の前に散らばっている米を食つて、自分たちが行くを知らない（意味不明）。飯豊に登る者はお堂があるたびに、白い米を手向けることになっている。その米は砂に混じつて真っ白に見える。近年、飢えて死ぬ者さえ多いので、かかる手向けを受ける神の心はどんなだろう。

ここから御沢までは西南の方向に下りになる。横道（よこどう）という。つつじ、五葉松など、刈り込

んだように地面を這って、上に伸びられない。常に風がはげしいからだ。

〔目洗い〕

十八く九町来ると、小さい池がある。目洗という。目の病がある者は、この池で洗うと治るといふ。道者どもは、米を打ち入れて、稲の種を撒くまねをして、ここでも豊年を祈るといふ。池の底に、二幅ほどの布を敷いてある。米を取るための業である。

南の方に会津の地蔵が岳、剣か峯などが見える。剣か峯は、とても整った山である。三十余町行くとお坪山というところに至る。松、つつじ、てらし（？）などという樹木が程よく生長し、白砂路（しらまなこぢ）のとてもとても清らかであるので

山姫の ちりをもしゑぬ 御坪山 風の手をもて かきはきにけん

また、霜ふり五葉の松を

とはにけぬ 雪にならひて いつまでも いつはの松に 霜そ残れる

世間でもて遊んでいる築山やり水などは、自然のように作って、見栄え良くするが、この御坪山は、人が作った坪前栽に似ていると褒め称えるのはとても興味深い。

草は、あかきの葉に似ていて白い花が咲くものもあれば、紫の花の咲くものもある。珍しいので摘んで袂に入れた。

左のほうに天狗の角力とり場という谷に聳えた巖がある。

岩のうへに さげるつつじの はな高く 風に木の葉の 飛もありけり

〔穴堰〕

春夏の花が咲き混じり、秋の紅葉が散るのもある。高い嶺には、雪さえ残り、四季のけしきを集めたよ
うだ。御坪山より二十町ばかり来て、右に下る川がある。小国の玉川の源で、荒川という川に合流し、越
の国に流れていく。

この川水を左の谷へ流し落としている。これを穴堰という。黒井忠寄は算術に優れた人である。わが国
の田の水が乏しい里に、この川水を引こうと、越国の了解を得て、公の了解も得て、山のあちらとこちら
からかねほり（鉞夫）に掘らせた。寛政十一年に事業を始め、文政元年の秋、貫通したという。忠寄が測
ったので、露ほども違わなかったというので、今も世の人が称えている。

暗穿山腹自西東 両竇相遭一水通

古来数術誰高手 独有亭々黒井翁

その穴の幅は、広いところは三尺ばかり、狭いところは二尺八寸九寸、高さ五尺、低いところは二尺六
寸七寸、深さは八十六間余あるという。今は苔むして自然の洞窟のようである。

〔御沢〕

大きな石の上を伝って登る。これを石はねという。三町ばかりにして御沢に至る。沢水ふたつが落ち合
うところだ。左の方に滝がある。不動滝という。道者どもがここでも垢離をとる。右の方に小屋がある。
ここまで米沢の岩倉より登りいる。

小屋に入って、昼食にまた餅飯（もちいひ）を食う。不動尊は滝にだけまつるのはどうしてかと人のい
うのを聞いて、

誰奉斯神巖上安

故教飛瀑瀉靈壇

堪笑明王満身火

与平相国一般看

と言ったが、三人より外に詩の心を知るものがない。白髪の翁がいた。年を尋ねると、七十に角ふたつ
生えた年と答える。われは、五十を一つ超えてすら、この山に登ったことを誇りにしなかったが、あなた
に会っては面目ないと言うと、昨日、最上から八十を超えた老人が詣でたという。老人の健康なるも限り
はないものだ。

ここより先は、難所なので、持ってきたものを皆打ち置いて、麻の衣一重に、雨具を来て立って出た。
石を跳ねて川を登る。六く七町ばかり登って、雪を踏み、滝が三つ落ち合う場所に至る。左の滝がとて
も素晴らしいので、

うき時の 泪にとては ひろはし（じ）な 袖にちりくる 滝のしら玉

といいながら右の滝に着いてまた登る。青竹の杖がたくさん捨てられている。それを拾ってついて行く。左に会津より登る道がある。

「会津きりあわせ」

小屋が二つある。会津きりあわせ（切合）という。この場所は、米沢の土地だが、会津より登っている例だという。ここらあたりより山の様子が大いに変わる。

ちよが（米沢では齒かけ菖蒲という）に似ている草が多い。雪が所々に残っている。三町ばかり行くと左に馬頭観音の堂がある。右に小屋があるが人はいない。また二町ばかり行くと左に小屋がある。金剛杖と竹の杖を売っている。また、寒水石と五葉松を売っている。私がひろった杖はこの金剛杖だ。御山を突いたものは麓には下ろさないというので、道者どもが捨てて置いたようだ。

秀臣があやしい虫を見た。形はいもり（守宮）に似ているが、大きく、腹がふくれて恐るべき様子という。後で聞けば、もみてふ虫で、男のかくし所を食わんとする虫だ。されば、穴堰を掘った金堀（鉦人）等は、夜はたふさき（犢鼻褌ふんどし）をよくして寝たという。雨混じりのあられが降ったので。

見し滝の 玉はひろはぬ 袂にも

風のあられを 吹そいれぬる

と言い捨てて行く。風はいよいよ烈しく、袖の上に降りかかる霰は、栗の大ききで、はらはらと音を立て

て降ってくる。

〔草履山〕

二十町ばかり来て大きな山がある。草履山という。左に堂があり剣の権現という。よその人が米を手向けるのを見て、

諸人の よねを手向る そてのうへに 乱れ争ふ 玉あられかな

黒木で鳥居のように作った門がある。その所でわらづ（草鞋？）をかぶるのである。それで草履山と言うそうだ。左に小屋がある。その中から、我ら呼び止め、このような風には雨衣は吹き巻き、歩くの大変だ、と言いながら縄を持ってきて、三人が雨衣の上を結って、お山橋はとても危ない、風が吹く方に身を傾けて早く行きなさい、石に躓かないようにと、丁寧な教え、いましめを言う。

七、八町ばかり下って、姥権現の堂がある。昔、中小松の里にいた老婆、自分は女であるが一念、誠があれば、この山の御神に詣でられないことはない、と言つてここまで来て、石になったという。その石は、堂の中にあつて乳が垂れた様子さえあるという。

松浦か たひれふりし世の ためしには 似てにぬうはか いしにもあるかな

と手向けた。その側に、銅で姥の形を鑄たものがあつた。秀臣は、これを見て、鬼女に似ているというのと、弥一は、また恐れて震えていた。二町ばかり行き、右に堂がある。

「秘蔵権現、お山橋」

秘蔵権現という。左に小屋がある。ここでお山橋（おさんきょう）の岩ほを雲きりの中から見上げるのは妙に畏れ多い。右に下るのをおひさう（秘蔵）と言ひ、左に登るのをおさん橋という。二つとも名に負う難所で、何人も過ちをおかしたところである。御山橋に登る。瘠せ馬の背のような所に、剣を植えたよな石がある。その石の上を渡つて行く。風は左のほうから吹いてきて右は深い谷に、断崖がそびえている。一足過てば死んでしまう。道者どもは、風が烈しい時には、犬のように腹ばいになり行くという。

我はひとり遅れて、急いで三町ばかり行く。大きな岩がある。その岩の腰を右から回つて行く。回るには、まず、三尺もある索を取り、少し下つて足下を見ると、千尋の谷であるうえに、飛び出た岩の鼻である。危ないこと言ひようがない。また、同じくらしいの鎖を取つて、あちらの方向へ顔を差し出した時の風の激しさは、持っている索も風で切れるのではないかと思ふほどである。

霰は顔にあたり目も開けられない。かろうじて這い上がり、またまた馬の背になっている所を走つていく。

わたりゆく 嶺のいは橋 いはんすべ せむすへしらに かしこかりけり

少し下つて、御秘蔵より登る道と合流する。私は、走りに走つて、御山のみさかのもとで四人に追いついた。御山を仰ぎ見れば、草も木もない険しい山である。登るべき通りにだけ、下より巔まで、石がふたつ

ら（二行）に並んでいる。その石と石との間を登る。この石がないと真つ直ぐに登るのは難しい。これは神の仕業かもしれない。

私は、このとき、疲れて息もつけない。あえぎあえぎ、言うに、そもそも此の山に登ったのは、神を拝もうという目的ではなく、越後の海を見て、歌を詠もうと思ったのだが、今日は、八重の雲、霧が覆って、嶺まで登っても益がない。

君たちは登って神を拝み、我はこの所で待ちたい、と言うが息が絶えそうである。（後で思えば、疲れて息が切れたのではなく、抗う風が入ったからであった。）

四人は、私がとても困っているのを見て、無理矢理伴うのも難しい、早く登って帰ろう、待ちわびたろう、小屋がある所まで下り、雨風をしのぎなさいと言って、皆、御坂を登る。

私ひとり残って、四方を見れど、身を寄せる場所もない。少し、犬が伏せたほどの石と小さい五葉松、つつじなど生えているのをよすがにうずくまっていた。

四人が登るのを見れば、大風が吹いてくる時は、岩の陰に身を潜めながら行く様子、時分の苦しさも忘れて、哀れに見えた。しばらくして、人も見えなくなり、心細さは言いようもない。御沢を出発したころまでは、暑さに我慢できず、汗を拭いたが、今は師走（十二月）の寒さとなって、身体が冷えて、肌へいららき耐え難い。

〔御山、御加護山、中奥、大奥〕

御山の後ろにつづき、御加護山、中奥、大奥などという山々聳えて、雪が真白に残るのが見えるその前を、雲霧が横様に走る。譬えようがない。また、一種の雲ありて、左の谷から縄のように細く立ち上る。登るに従い、いく枝にも立ち分かれ炎のように、あるいは手の指を開いたようになり、横に吹きたるを見れば雲ではない。風とあられである。

その時の激しさは、すがつていた石と一緒に遙かな谷へ吹き落とされると思うことがしばしばであった。また、左の沢（この沢水は、越後の大きな川の源であるという）から、いろいろな木の葉が吹き上がってきて、右の谷に誘っていく。

私が思うに、この山の神に手向かうとて短冊に歌を書いてもってきたが、今は用なしと懐から取り出し、風のまにまに散ってゆけと放り投げたけれど、つつじの枝にかかって止まり、あはれ大風が吹いてきて飛んで行くかと思つたが、降ってくる雨に濡れてびたつとついて飛ばない。歌だけは、神も受けとつたろうか。

このように空の景色はいよいよすさまじく、いりもみする風に、たばくる霰、身をしむるように思える。このような時に歌を読んでこそ、年頃学んだ雅みやびの道のかひこそあれと男魂を振り起こして考えたけれど、雨衣は吹きまかれ、笠をとられ、つかの間も安心していられず、一句もでてこない。

身につけたものは、濡れないものはない。寒さは骨こほに透り、身体は凍え、足はなえ、苦しきは譬えよう

がない。このように時が過ぎれば、命も危ういと思えば、とてもくやくしく、口惜しく、手を握り、齒をかみ、自分の歌を詠もうとする真心でもって八重の白雲をかきわけつつ、ここまで登ったものを、目に見えぬ鬼神もあはれとは思わないことはない。

罪がないものの命を失っても、神の心が正しいのなら、さあ殺せ、さあ失えと右に呼び左に叫び、四方をにらんでも、目に遮るものもない。なんと、あやしい、雨がたちまち晴れ、霰も降らなくなった。

しかし、風は、なお、止まず、寒さはいよいよ耐え難くなり、ここで凍え死ぬよりは、小屋がある所まで下ろうと、やおら身を起こし帰ろうとする。七〇八間下の山のたるみたる所の風のつよさ、五歩ばかり吹き飛ばされた。おさんきようを独りわたり、谷底へ吹き飛ばされたら、屍をひろう手段もない。

また、無事に下れたとしても、小屋にいる会津の人たちに、米沢から侍が三人来たが、一人は罪深くして御山にも登れず、凍えて死ぬばかりなのを、命を助けたなどと言われては、我が身はともかく、国に恥をかけることになると思い返して、もとの石のもとに帰っていた。

〔五大虚空蔵〕

四人は、私に分かれて登ったが、風が烈しいので、助松などという木の下に身を隠しつつ、十四〇五町登って、一の王子、二の王子より、五の王子（一の宮、二の宮ともいう）まで五つの堂がある。これを五大虚空蔵と言って、飯豊の本社なり。

その堂は、はたして会津の方に向いていた。堂のめぐりには、石を積んで風を避けている。三四五の堂のほとりに、御室おむろという板葺きの家が三つある。別当を蓮華院と言つて、会津の方の麓にある。その法師が登つていて、常ではない風だと恐れている。吹いてくる方に向かい、数珠じゆずを押しもみ、読経どきよを続ける。四人は堂を拝み、お室に入り、穀湯と言つて、あづき湯に飯を少し入れて飲ませている。風は、いよいよ激しく、板屋はなりひびきどんな事が起きるのかと屋内の人たちは色を失っている。法師は経読みを終わり、御室にきた。

あやしい風が吹き起こるのは魔閻のものが登つたからであると言つて秀臣、高庸を見て、この山の神は、刀を忌み嫌っているのに、どうして刀二つつけてきたのだ、早く去れ、と言ふ。屋内の人たちは、声を低くして、今日はここに泊まり、明日早く下りなさい、と切に留めてくれた。富蔵と弥一は風を恐れて、ここに宿ろうと思つている。秀臣と高庸は、声を振り立てて、登つてきたのだから、下れないことはない。私たちに従つて来いと、駆けりに駆けて下る。

高庸は、誤つて、大きな巖の上から倒れ落ちたが、少しの傷も負わなかった。私は、御坂のもとで、かじかんで四人が下ってくるのを仰ぎ見ていたが、待てども待てども影すら見えず、いよいよ冷え凍えて、今は冬の虫のように声もたてられず、手足はかがまり、ただ息をしているだけになっていた。

四人がようやく下つてきて、さぞ寒くてつらかつたろうと言ふのを聞いて嬉しいこと限りない。縮こまつていた手も足も、自然と伸びたように感じた。富蔵、与一らは、この時に到り、かみしものゐや（？）

をも忘れ、おのらを（？）振り捨てておさんきょうを渡って行く。三人も、いざと、一緒になつて、こんどは御秘蔵に下る。巖の横に穴を開けて、剣を納めた所がある。

〔御秘蔵に下る〕

索を持ち下り、仰ぎ見ると、あやしい巖に聳^{そび}えて唐画に書いてあるような上、中、下と三段に道がある。その上、中の二きだ（段）を行くには、屏風^{びょうぶ}という岩にとりつき、手と足と、おくべき所を求めながら、蟹の横ばいでわたる。足並みを悪く踏むと、先へも後へも退くこともできず、岩にすがって泣くだけなどという場所である。危ういので、下の段に下る。

上に伊達政宗の納めた剣があると聞いたが、下からは見えない。ここはおさんきょうの岩のそこで風は少しも吹かない。富蔵、弥一は、おさんきょうをわたり、あちらの方より下ってきた。われらを迎えた。岩の上に二人が登り、ここへ登るようと言う。その所までは真つ直ぐに立った岩が七、八間もある。ましら（猿）ならではと思うが、高庸は事も無げに登る。私は手が凍えて登ることができない。悔しいことだ。

此の度も、おさんきょうを登って、もとの方に登る。秀臣も、私独りではやれないと、一緒に行く。おさんきょうを渡る時は、風は少し止んで、思ったよりも安心であった。お秘蔵権現まで、五人そろって、互いにつつがないことを喜びあった。

いにしへの よもつひら坂 のかれこし 神のこころも かくやうれしき

四人は、私の足が遅いのをもどかしがって、雨衣二つ三つ重ねて寒さをしのぎ、静かにこよと言つて慰め、先に行く。年毎に人が失われるという恐ろしい山路を歌など考えながら、おそろしいとも思わず独り行くのは我だけと心が高ぶる。この時、天狗はいるのだろうか。とてもとても危うい。

〔草履山に下る〕

草履山に到着する。草鞋を替えようとするが、手が凍えて解くことができない。弥一が来て変えてくれる。秀臣、高庸は小屋に入り、甘酒を温めさせて私を待っていた。二杯飲んで、ようやく人心地が付いた。この堂に手向けた米で、作ったという。それで、砂が入っており歯にあたる。小屋を出る。

また独り遅れて行く。切り合わせに到着する。この度は、酒（しろき）をあたたためさせて待っていた。甘くて酔ってしまうようだが、三杯飲んで、身体があたたまる。はじめて、蘇った心地がした。これは会津より持つて登ったという。このような年並みにも、会津では酒を禁じていない。

私は、小屋の主に、先日、会津の人が多数死んだと聞くが、いかなる嵐だったのかと尋ねたが、小屋の主は、米沢人のさがしら（差し出がましいこと）である、人が死んだことはないと答える。

ここを出て、富蔵が歩きながら言うには、年毎に、会津の人がみな死ぬるを主は恥じてあのように言うのだ、屍しかばねを小柴で包んで背負い下るのを見た人が多数いるという。

五人とも、萎いて御沢に着く。火をたいて濡れた衣類を干す。高庸曰く、今日の嵐はこの滝に立たしす
すみいつ（稜威）かしこき（畏）御神を、腹黒い清盛に譬えたことのがめであろうと。それで、神の心
を和めようと

瀧つ瀬の とどろに落ちる 岩のうへに うごかぬ神ぞ たたしましける
といへば、秀臣も

手にもてる 剣の光り てりそひて 御火あきらけき 神にもある哉

我もまた、

まきもたる みての縄もて いましめん 神の誓か 世の倭（ねちけ）人

と言って、手向けた。神は受けてくれたろうか。日も高いので、いざとて、手のひらに例のもち飯をのせ
て二、三個食うと言って

家があれば けにのみ盛りて 食ふものを 飯豊の山は いひをてにもる

と、たばれて出立する。高庸は、今日の嵐、麓の方はどうだったのだろうと心配する。夏の頃に寒とい
うのも、この頃日照りで稲の穂なみが立ち直ったと喜んでいたのが、我々五人が山に登り、風を起こし、
民草を吹き荒らしたなどと言われたにはたまらない。かろうじて、拾ってきた命を今は惜しくないと思う。

「地蔵岳の御室に戻る」

日暮れて地蔵が岳の御室に着く。飯を炊いて出す。今日は餅だけで腹を足していたので、飯が珍しいと箸を取るが、砂をかむようである。この山の水で煮ると粥も煮えない。唐人の書いた山山蜀記という文にも、そのように言っていると覚えている。日本も外国も、かかる奥山は同じなようだ。

炉がふたつある。上の炉には、高庸、秀臣と私の三人が、下の炉には、主と富蔵、弥一の三人が、大きな木をくべて、其の回りに雨衣をまといて寝る。風が戸を鳴らし、雨が板屋を打る音がしきりに聞こえて、寝るともなく、覚めるともない。

夜半にかわや厠に行こうと灯火を下げて出る。火は風に消されたが、夜は暗くなく、空も谷の底も雲が満ちていて、高い嶺々を吹きすぎる風の音はすさまじく、けものが吠える声さえ聞こえて、寒さが身にしみ、ものすごいので急いで家に入る。今、吠えたのは何だろうと問うと主は、それはオオカミだと答える。この山に多く棲すんでいる。

人に従って登る犬がいれば、夜は必ず出てきて、その犬を食うという。今朝の犬は、どうなったのだろうか。このことを知っていれば追い放して、連れてこなかったものを。理由もない罪を作ってしまった、と悔いてもかいがない

寅の刻（午前四時）にもなつたらうか。人の声が聞こえるので、富蔵らの寝言かと思つたら、詣でに来た道者の声だった。間もなく登ってきて、地蔵を拝み、さんげさんげいちに礼拝地蔵の権現と同音に唱えていく。また、少しして、念仏を唱えながら多数の人が来る。

主が出て、さあ休みなさいと言うが、立ち寄らないで地蔵を同じように打ち拝んでいく。主が入って、富蔵に話すのを聞くと、たかとうろ（高燈籠）の鶴が人の案内をして来たという。いかに靈山であっても、鶴が人を案内してきたとは、とてもいぶかしいと言うと、主は笑って、高造路という所の崔という人である。

おととい（一昨日）、寺の前の高燈籠の竿の上に鴉がとまったのを見て、このように聞き間違えた。夜が明けて、この小屋を出る。雨は晴れたが、空はなお曇っている。主が見送りに出て、南を指さし、こちらが会津である、雲がないと磐梯湖が見える、東は置賜郡、西北の隅は越の海漕いでいく舟の帆さえ見える、と語るのを聞いて、

天きららふ 雲のあなたに たどるかな ふるさけみんと 思ひこしちを

と言って足ずりす（意味不明）。御山の方を仰ぎ見れば峯は雲が覆って、風の音がすさまじいので、なつかしくもなく、袖をはらって坂道を下る。下るのは楽で、歩くというより滑りに滑って御田植えに着く。小屋に入り、休む。あやしい蛙がでてきた。腹も手足の裏も真っ白で、赤と黒の紋がある。

秀臣は、珍しいというので、筆を取りだし写そうとするが、あちらを向き、こちらに跳ね、書かれないようにしているようだ。どんな心なのか、はかり難い。長い舌を出し、蠅をつけて食うという。主が高庸に言うには、この御山には大きな木が多いが、家作るには使えない。

されば、地蔵のお室立てるには、麓の岩倉より負い登れば、その費少くない。それは皆、殿より下し

賜るなり。しかるに、この小屋のあちらに杉が二、三本ある。皆よく成長している。このあたりの小柴を刈って杉をたくさん植えておけば、我々が年老いたころの世のためになるだろう。力を貸して下さいとまめ（忠実）に言う。高庸が聞いて、汝、よくも申したり。我、杉苗を手に入れてやろう。しかじか計らえと懇ろに教えてここを出発する。

木の枝に、きぶのり（蘭苔、モス）、さるおがせ、などというものが懸かっている。見慣れぬものから、露湿っていれば取らず。秀臣は、小柴をかきわけつつ、大きなぶなの木の倒れたのを渡り、きくらげ、という茸（くさびら）を取った。坂をたくさん下り、大日に至る。

「大日に下る」

富蔵、弥一は、早く来て、朝かれひを準備して待っていた。六十あまりの翁がいて、高庸をもてなすとして、昨日、鳴瀧という瀧のもとに行き、マイタケという茸をとったが、にわかにな水が出て、命さえ危なかったという。その茸を羹にして出した。その志をたたへて食う。

この所を出る。詣で来る人に、昨日は風が吹いたかと問うと、少しも吹かないと答える。うれしいこと限りない。あいよし沢、千本松、葡萄沢など過ぎて、道の左に人一人這って入るばかりのふせ庵がある。高庸が、目早く人が住んでいるのを見て、富蔵に尋ねると、これは我が村の周助が春のころ、このほとりに山畠をつくるのでこしらえた借りの庵である、今、人が住んでいるのは不思議だと、その人を呼び出す

が、返事だけで出てこない。

激しく呼んで、ようやく出てきたのを見れば、六十くらいの瘠せた男である。おまえは、何者で、このような山中に隠れ住んでいるのか、良いことではない。早く出て行け、と言われて、この男は、咳をしつつ、やつがれ（僕）は、会津の者である、薬掘り、魚とりに来たが、収穫が無く、早く帰るべきを、風の病に寝込んでいた、治るまで許して下さい、という。高庸は、病めるのであればしかたない、治ったら早く去れと厳しく言う。

御蔵王にいたる。みやげ（いえづと）に砥石といひかひ（飯匙）を売る。砥石は重く、飯匙は、いひかひなしと言って買わない。おさ橋を渡り、竹谷に至り、高庸は木地を挽く家に立ち寄り、主を呼んで葡萄沢のこなたの周助の仮庵にあやしい男が住んでいる、知らないでいるのは汝らが怠りなり。このように穏やかならぬ時に、かかる者を住まわしてはならない、早く行って追いやるべし、病気と言うが誠ならば、薬を与えて懇ろに看病せよ、死なせて村に、騒動を起こすな、など教え諭す。

その時、私らは木地挽きということは、まだ見ていない技なので、好奇心で足休めがてら見ていた。しばらくいてここを出る。また、おさ橋をわたる。渡り終わって、心落ち着いたとき、後ろより、「あなあやし」と言われて足下を見ると、大きなまむしが眠っていた。驚いて、あちらに飛び退いて振り返って見れば、まむしも、自分のおびえた声に目が覚めたようだ。首を高く差しあげた。色は灰色で、目は赤く光っている。驚かされて、おどろかすかとうちづしつ、高庸に向かつて、

灰色の　へびかねむりを　かきおこし

といへは高庸

目は埋み火と　ひかりぬる哉

とつづけた。

富蔵は、そのまむしを杖にかけて、あとより渡つて来る弥一の顔に差し出す。弥一は、あと叫び、後ろにはねのけた。橋が揺れてまむしよりも危ない。若者の戯れも、ほどほどにしないとと思う。昨日は、夜明けない内だったので、このあたりの山の様子が見えなかったが、御倉山はうしろの方も、妙なる岩山で、五く六町ばかり川に沿って聳えている。

〔岩倉に戻る〕

牛の刻下る頃、岩倉の文右衛門の家に入る。道者どもは、此の里に帰ってきて、さうじ（精進）のなか落といふことをする。昼食は、いわなという魚を煮てもてなした。湯浴びし、髪などを結わせて、未（午後二時頃）過ぎる頃、この家を出た。

誰や彼や、見送りに出て別れを惜しむ。山中の人は、心もすなおで、なさけも深い。上谷地白川を過ぎ、下谷地をへて上原に至る。高庸曰く、最近、越後の国からあやしい歌と踊りを伝えて、その歌の節が良く、誰もが踊りたくなる、踊った人の内に神がついて、いへる所しるしがあるという。

左の山陰に、うつ沢という里がある。その里人が、この遊びをして、一人の男が倒れ伏して、心地無く、しばらくして、むくつと起き、目を怒らし、拳を振り、足を踏みならして、我は飯豊の山にありし不動明王なり、このたび、この沢に遷座した、祠を建てて祭りなば、長く村を守るべし、ゆめ疑う事なかれ、と言う。

里人が、なお疑い、再び遊びをすると、今度は幼い者について、同じ様に言う。里人は、本当のことと信じ、宮を建て祭ろうとする。あらたに堂をつくるのは、公の掟があつて許されずといえど、なお、言い止まず、おろかなる民の、こぞる（集まる）は、鴨川の水にぞと言う。

法栄寺の前を過ぎる。先日、このほとりに、うない（子ども）らが筵（むしろ）敷いて火打ち石を売っていたが、今日は、いないので、みやげ（家苞）に買えない。高庸は、行き交う人等、男女すべて見知っている様である。汝が司の里のたくさんの人を残り無く分かるのかと尋ねると、これは、我が覚えの良きにあらず、この山中は田の実りが悪いので、この年頃、殿から賜った米で命をつないでいる。その米を与えるには、私有家毎に訪ねて家内の様を見て、人の多い少ない、老か若きか、勤めているか否か、富めるか貧しきかまで詳しく調べるので、家ひとつ、人一人知らないことはないと言答する。

近い国の人は、あるいは飢えて死に、あるいは、かたい（乞食）となつて、家を出て三人に一人は死んだと聞く。我が国のみは、さる人の一人もないことを思うと、今更に、尊く有りがたくて、涙が落ちる。六角峠を越えて、橋をわたり、黄昏に須郷の村長山口太郎兵衛の家に泊まる。

出居の床に、そろばんと弓と三味線を飾って置いている。そろばんは、年貢を調べる第一の宝なので、言うまでもなく、弓は、侍の心あらせて私心なきを表し、三味は三本糸の調べで心を和らげ、頑ならせないようにする。

むらおき（村長）か 村をおさむる 心とて 三つの宝や かざりおくなる

主の心は、このようにあるかないか。昨日の夜、地蔵の高峯に伏せっていたとは、様変わりして、こころ落ちついて、うまいす（熟睡す）。明ける明日の辰の刻半ばかりに此の家を出る。（

菅沼峠を越えると、中津川をかえりみれば、このたびは、大部分行き来した所である。高庸に、この山はこう言い、この川は何と言い、あちらに見える家のある所は、こう言うなど教えられて、先日に見渡し たときよりも、今日はひとしおの景色である。秀臣は、小屋、広河原などの里を見て

こやのさと 家いちひさく 見ゆれとも ほそき流れを 広河原とは

といへば、我も

しら川の 岩きる波は しろけれと 数馬のさとに 馬はかずなし

という。高庸、この白川の流れにしたがって下れば、小坂、高嶺などの里あると

高みねの 巖はさほとも 高からで こそかの坂ぞ さがしかりける

という。三人とも、皆、同じように詠んだので、六つの手を打って笑う。先日、休んだ茶屋がある所に至る。今日は、売る者もなく、主もない。十六く七ばかりの子どもが、檜の木の棒を作っていた。高庸が

言う。三年くらい前に、この子の兄弟が疱瘡ほうそうを病んで命が危うくなり、その父が思う様は、神という神は多けれど、御屋形おやかたほど尊きみかみはない、前の川で垢離をとり、大城のかたに向かい、どんなに荒れる年にも、年貢は一粒も怠らない、大江戸に上り下りします時は、必ず、大城の下に来て、盛り砂ということをして、送り迎えを行うと誓って祈りければ、五人の子のもかさは、事もなく治った。

然る後は、願いごとに、大城に向かつて伏し拝むこと一日も怠らない。また、この親と子は、三年、四年、こなた棒を作つて生業とする。この棒は、ふさわしくないものである。米の価、高くして、世に盗人多いので、それを防ぐために買うのである。早く、この棒が売れない世の中になればよいという。かの黒和尚にこそ、かさまほしけれと笑う。

今回は、新道を下る。峯つたいで眺めが良い。袖の沢、琵琶の郷などの郷を見下ろして

山姫の 松にしらぶる びはのさと 霞のそでの 沢もみえけり

と口ずさむと、高庸は、春の歌のようである、という。それでは、尾花か袖のと、改めるかと言うと、秀臣、万葉には、霞を秋にも詠んでるので、もとのままでも悪くない、などと言って、湯田に至る。

道の左の家で休む。主は、青大豆を煮てもてなす。この秋の豊かさは、豆の実りの良いことで分かるという。同じ里の者なのに、田を知らぬ寝言と我をのしった翁とは、うらうえ（表裏）で、とても、睦まじく、懐かしいので

里の名の ゆたけかるべき 秋をさへ 見するあるじの まめ、こころかな

と言つて、この家は立ち上がりけり。しばらくして、この所を出る。返す返すも、かの翁が憎いので、その家の前は爪はじきして通る。(此の年も、思うようにはあらず。実りは悪かった。いつわりをめ、誠を憎みたるは、私の人格の浅さであると、のちに後悔して、身に汗が出た。)

高庸は、奥田という里に行くに左に折れる小道に分かれる。少しゆくと、振り返り

あすはとて 我もかへりて、いひて山 いひ出てこそ 君とかたらめ

と言ひ捨てて行く。歌を返そうと思つても、路へだたり、黙つた。長嶺を越え口田沢に至る。

飯豊山上袴年豊 卓午帰来笠子風

四日艱難添幾瘦 行人妄喚少陵翁

このように吟じながら、茶屋に入り、昼のかわいいひ(昼食)を食う。主の嫗を呼び、声を低くし、一杯ちようだいよ。誰にもいわないからと言つと、嫗は襟をかき合せて、居直りて(いずまいを正して)、かかるお恵み深き国にしながら、掟にそむき罪をなされるとは、二つの刀を帯びている人とも思えないと言ひ込められて、飲まぬ酒に顔を赤らめた。

炉の回りに、三十代のきれいな女がいた。もの狂わしいさまで、あらぬことを口走っている。夫と分かれて子どもを失つたのだろうか、と思つと、とても哀れに覚えて

たをやめが ほそき心の 糸薄な とて嵐の 吹舞しけん

と言つて、ここを立つ。矢子に至る。右の方に山がある。伊達政宗が主の時の城のあとがある。霞城とい

うと聞けば

いにしへの 跡とふそでの 泪には 秋も霞みて 見ゆる山じろ

と言って、すぐ、館山に至る。秀臣は、物を商っている家に入り、みやげ（家つと）を買うのをみて、もみてふ虫に食われ給わぬこそ、良いみやげだと言って笑う。申の刻ばかりに家に帰る。

劉阮塵縁未得離 帰来漸覺一身疲

曾遊諸岳経危嶮 若較此山皆担夷

陂上竜跳投杖処 袖中雲起解装時

毫頭雖泄靈区秘 無復山神幻怪奇

筆にさへ 猶たどらるる 山ぶみは

おいにきとこそ みるべかりれ

この日記は、わづかに四日の山ぶみながら、百年も過ぎたように覚えて、浦島の児ならねども、肌もしわがより、白髪になった。

飯豊の山ぶみおわり畢

城北仲間町なかままち

泉崎氏